

「立ち水」「伏し水」について

岩 下 紀 之

1

連歌論「筑波問答」は、冒頭稚珪蛙鳴の故事の引用によって始まり、二条家の庭園らしき庭が描写される。そこに東国の翁が現われ、庭を拝見することを請う。許されて庭の水の流れを讚美して、いろいろなことを言うのであるが、私見によれば冒頭の稚珪蛙鳴の条が「蒙求」の引用であることよりはじめて、以下『孟子』『揚子法言』『神仙伝』（これは何らかの類書の孫引きであろうが）などの語句が口（注）にされている。このあたり、良基は学識を披露するのを楽しんでいるように見える。

こういう文脈の中で、翁の発言はこのように開始される。

あはれ、いさぎよき水の流れかな。水には、立ち水伏し水といふことのあるなり。これぞまことの立ち水にて侍らるん。

文の流れから見て、これも何かが引用されているように見られるのである。

ところで「筑波問答」はやく「日本古典文学大系」の連歌論集の巻に収録され、木藤才藏氏によって頭注がなされて

いる。該当箇所には『兼載雑談』が引かれ、

たち水とはわきいづる水なり。ふし水とはながるゝ水なり。

と示される。『新編日本古典文学全集』にも連歌論集の巻があり、奥田勲氏校訂による『筑波問答』を収めるのだが、この箇所の頭注は、同じ兼載の文を引いている。兼載は良基より百年以上後の人物であるから、この引用は出典を示すのではなく、この語の意味するところを明かす参考の役を果たしている。

現行の諸辞書においても、「立ち水」「伏し水」を立項する限りにおいて、『筑波問答』と『兼載雑談』を用例として挙げているものが多い。例を示すと、『日本国語大辞典』は「たちみず」「ふしみず」の両語を立項し、用例として『筑波問答』『兼載雑談』を掲出するほか、「ふしみず」の項では別に『久安百首』から藤原親隆の一首を引く。その他の諸辞書も、おむね兼載の説によった語釈をしているので、それぞれが工夫をこらしている、どこか似かよった説明になるのはやむをえない。それらの中で、『時代別国語大辞典室町時代編』は「たちみづ」の項で良基、兼載の二書とともに『地下歌合』からの一首、「ふしみづ」の項でも、この二書以外に『伊呂波拾要抄』なる書物からの用例を示している。

ふし水 伏水、ナガレヌ水也

というのであるが、兼載は

ふし水とはながるゝ水なり

というので、この両者を調和させるのは困難であろう。なお、『伊呂波拾要抄』は『時代別国語大辞典』の出典一覽によれば明応十年成立というので、兼載とは同時代である。

これら諸辞書の編集者は、広く用例を求めたうえで語釈をほどこしたのであるから、それらを総合して、「立ち水」「伏し水」の語の性質を考えてみてよからう。すると、用例として古典的な散文作品が見当たらないのに気が付く。それぞれの語に和歌の用例が挙げられており、『時代別国語大辞典』が「たちみづ」の項で歌語としているのは理解できる。ただし

『国歌大観』を検索してみると、「ふし水」の語は平安時代の和歌としては『久安百首』の藤原親隆と、『俊成五社百首』二六番歌があるのみであり、この二首はともに『夫木和歌集』にも撰ばれた秀歌であるにしても、勅撰入集歌ではない。「立ち水」のほうは、正徹の『草根集』に四首、正広の『松下集』に一首あるのみで、良基以後の用例しか見ることができない。この両語は歌語であるかもしれないが、決して万葉以来、あるいは三代集以来の熟した用語とは言えないであろう。また、標準的な古辞書にも用例がないようで、『伊呂波拾要抄』という稀観書が博覧の編集者によって引かれたのみである。

『筑波問答』では、両語は一对をなすように記されており、校注者の木藤、奥田両氏が、同じく一对の語として記載する『兼載雑談』を引かれたのは、妥当な処置であったことがよくわかる。その上で、良基以前で、両語を対にして記す文献を見出すことができるかを考えてみたいのである。一首の和歌に「立ち水」「伏し水」の両語を詠み込むのは困難であろうし、一方散文作品にも該当する作品がなさそうだというのが出発点である。

2

鎌倉時代の東国の僧仙覚は、万葉研究史上の大先達であり、本文校訂については最大の業績を挙げたこと、注釈の面においても『萬葉集註釈』（以下『仙覚抄』とする）が、中世の万葉学を代表すること、周知の事実である。京都大学国語国文資料叢書別巻二として、仁和寺蔵『仙覚抄』が刊行されたが、そこに次の文がある。^{註三}二七九四番歌の注である。

隠津之澤立見尔有石根従毛達而念君尔相卷者

此哥第二句古點ニハサハタ、ミナルト點ス、ソノ心アヒカナハス、今和換云サハタチミナルトイフヘシ、コモリツトハシタニカクレタルミツ也、サハタチミナルトハ、サハトハオホシトイフコトハ、多文字ノヨミ也、タチミトハイツルミツ也、水ニタチミツフシミツトイフコトアリ、フシミツトハ、シタニアリタレトモイテナカル、コトナキ水也、タチミツトハ、ワキイテ、ナカル、ミツ也（以下略）

傍線を付した箇所は「筑波問答」に逐語的に一致している。「仙覚抄」の成立は、文永六年であるから、良基より古い時代の成立であること、言うまでもない。また仙覚が万葉学の大家として良基の視界にあつたことも明らかである。『万葉詞』に万葉一二五番歌の

ヤチマタニト 是ハ南都ノ橋寺ノ前ノチマタ欵 仙覚説

とあつて、疑う余地はない。

本稿で問題としている「立ち水」「伏し水」について、該当箇所を抜き出して並べてみよう。「仙覚抄」は平仮名に改めて引こう。

水にたちみつふしみつといふことあり、ふしみつとは、したにありたれともいてなかる、ことなき水也、たちみつとは、わきいて、なかる、みつ也

『筑波問答』を再度引こう。

水には、立ち水伏し水といふことのあるなり。これぞまことの立ち水にて侍るらん。

「伏し水」の用例が平安後期「永久百首」に初めて現われるが、出現頻度は高くないこと。「立ち水」の初出が正徹であること。とすれば両語を一对としてとり扱うのは一般的でないであろう。従つて両語を一对のものとしてあつかう「仙覚抄」と「筑波問答」の二書の関係は極めて緊密であらうこと、言い換えれば、直接的な引用と推定されるのである。『筑波問答』

に現われる翁は、東国出身で、「立ち水」「伏し水」のことを物語っており、また仙覚は万葉諸本を比較校合するために、京の貴族たちとは何らかの交渉を持ったこともあるだろう。こう見てくると、翁には仙覚その人と重なる性格が付与されているように見える。もちろん、仙覚には連歌との関りを示す伝承は一切ないのであり、以上は単なる想像にとどまるのである。

次に「兼載雑談」を検討してみよう。

たち水とはわきいづる水なり。ふし水とはながる、水なり。

二語を一对として述べている点、仙覚、良基の系統に属しているのは明らかであるが、「立ち水」「伏し水」の説明は仙覚説と異っている。そもそもこの二語は明確に対比的な説明をほどこされた時にのみ、はっきりと印象付けられるはずであるが、兼載の説明ではこのあたりが鮮明を欠く。湧きいでた水はそこにとどまることはなく、どこかへ流れ出すのであり、「伏し水」をながる、水と定義したのでは、両語の違いが曖昧になってしまっている。兼載はこれを一对の語として承知してはいるが、仙覚説は知らなかったようである。このような事態の生ずるわけを探ってみることにしよう。

3

南北朝から室町時代にかけて、万葉研究の代表として仙覚の説が高く評価されていたことを、『冷泉家時雨亭叢書 中世万葉学』^(註五) 解題で、竹下豊氏は『了俊歌学書』『落書露頭』『正徹物語』を引用して紹介している。今川了俊と正徹の師弟が仙覚をこのように認識していたこと、また、正徹と正広の師弟が実作に「立ち水」の語を詠んでいること、さらに「時代別国語大辞典」が引く『地下歌合』の判者が正広その人であること、などから、了俊・正徹系統のうちでは仙覚説が尊重され、その説に基く歌語を実作に取り入れる試みがなされていたことが判明する。しかしながら、連歌師の連歌の実作には、

この両語は確認できないように思われるのであって、『仙覚抄』に対して関心がはらわれているとは見えない。兼載もその流れの中にいた一連歌師であり、『立ち水』『伏し水』についての仙覚説との接触はなかったであろう。

それでは逆に、『立ち水』『伏し水』の語そのものは知っており、なおかつその解釈まで試みているのは何故かというに、彼が『筑波問答』の書写に関わったことが思い出される。現在広く提供されている古典大系本、古典全集本は、それぞれ校注者の木藤氏、奥田氏が最善と判断した写本を底本とされたのであろうが、その東洋文庫本、内閣文庫本の両方に、次の奥書がある。

此一冊就書写雖有不審、依古筆強而不能直付之

于時明応五年二月二十五日 兼載判

すなわち兼載は『筑波問答』の善本を見てこれを書写し、それが後代に流伝していったのである。

こうして、『立ち水』『伏し水』の一对の語から、仙覚の万葉学の伝承の仕方が見えてきたように思われる。良基はおそらく『仙覚抄』そのものを見、『立ち水』『伏し水』の説を興味深く思い、これを『筑波問答』に利用したのであろう。明応五年の兼載は、『筑波問答』を書写し、『立ち水』『伏し水』を語る翁の言説を心に留め、その語釈を考案したのであろうが、その時仙覚の説には気が付かなかったのであろう。

4

以下は蛇足になる。実用を一義とした連歌師には『仙覚抄』があまり読まれなかったようであるが、万葉の研究に専念した注釈家には、この両語の研究に目を止めたものがある。『拾遺采華抄』に注こうある。

一 澤タチミ、草ノ中ヨリ流出タルヲハ立水ト申。サハ、多キ立水ト申也

ここでは仙覚説を受けついだ考説がなされているよう。江戸時代に下ると、北村季吟の『萬葉集拾穂抄』の二七九四番歌頭注に、「仙曰」として『仙覚抄』が引かれ、契沖も『萬葉代匠記精撰本』で二四四三番歌の注に同文を引く。二四四三番歌と二七九四番歌は類歌であるので、契沖はまずこの位置に引いたのであろう。

それ以後は、二七九四番歌について諸家は『仙覚抄』の説を全くとり上げていないようである。仁和寺蔵『仙覚抄』の解説で木下正俊氏は、

仙覚の万葉集研究が理論の面で今日の万葉学に何ほど裨益するかを論ずることは殆ど無意味であろう。

と言い、『冷泉家時雨亭叢書 中世万葉学』（注七）解題で竹下豊氏は、

仙覚の『万葉集註釈』は、今日的な目から見れば、問題は多い。

と述べる。仙覚は二七九四番について、原文の「隠津之澤立見尔有」を、古点が「サハタ、ミナル」と訓むのに対し、「サハタチミナル」との訓みを提起し、ここから「立ち水」の語を取り出しているのである。ところが、この箇所（注八）の訓は次第に「さはたつみなる」に落ち着いて来ているのであって、「立ち水」の議論は根底から出る幕を失なってしまった。『筑波問答』の典拠を探究する際、『仙覚抄』が盲点となってしまったのは、以上見た様に、仙覚説の現代万葉学における位置と、一首の歌について言えば、仙覚の訓が定訓となりえなかったことに起因するのであろう。

契沖は「立ち水」について、さらに探索し、『詩 大雅 瞻卬』に「鬻沸檻泉」とあるのを引く。実際には『爾雅』の积水の条を引用し、

檻泉正出、正出涌出也

と記し、そこに邢昺の疏をそのまま付記する。大雅の瞻卬は邢昺が疏に引用したものである。「檻」と「溢」の二字が通用している。契沖はこのようにある語の典拠を探ろうとすると『十三経注疏』を即座に想起することができた。念のため『文選』の索引にあたっておくと、卷二十に潘安仁「金谷集作詩」に、

濫泉龍鱗瀾 激波連珠揮

とあり、李善注は先に見た「爾雅」を引く。經書なり「文選」なりの訓詁語に、「立ち水」にあたる大和言葉があつた可能性はどうであろうか。ただ契沖は「仙覚抄」の「立水トハ涌出テ流ル、水ナリ」の「湧出」の部分の典拠を考えていたのかもしれない。

最後に歌語としての両語を考えておきたい。「伏し水」はすでに見た通り、「久安百首」、「俊成五社百首」に用例があり、稀にはあるが歌語として使用されている。しかし「立ち水」は平安・鎌倉に用例がなく、「仙覚抄」をさかのぼることができない。歌語としての初出は正徹であるらしく、「国歌大観」の「草根集」一八二三番歌

岩こえて音なき浪も立水のながれあまたにさける藤かな

以下四首がある。弟子の正広も「松下集」一八〇番に

こすにきて吹まく月の下風に秋もや思ひ立水の声

がある。「国歌大観」全巻から、この師弟の計五首のみが「立ち水」用例のすべてであり、これも使用頻度の稀な語と云うべきであろう。正徹の言説から見て、「仙覚抄」から「立ち水」の語を見出し、作歌にとり入れて可能性を験したと考えられる。中世の歌人としては、懸詞の可能性に魅力を感じたのであろうか、正徹作の四首中三首が「浪も立水」「我が名はまだき立水」「はやくうき名は立ち水」と懸詞になっている。同じことを正広も「思ひ立水」、また正広判の「地下歌合」でも

むすぶまに夏の日なみは立水や露ちる秋に庭の夕かせ

と、同じ修辭法が用いられている。このように正徹と正広が「立ち水」の語を実作に試みたものの、他の歌人には広まらず、この語も一般的な語に成長することができなかったのである。中世の歌人にとって、歌語はまず和歌的な修辭について、どれほど使い勝手がよいかが一義的であつて、万葉語としての内容の探究に関心があつたようには見えない。以上本

稿は『筑波問答』の一文の出典についての試論である。

注一 拙稿「二条良基の漢学の素養——『筑波問答』の引用文をめぐって——」（『連歌史の諸相』）所収。

注二 出現頻度の高い語でないため、ある程度の規模の辞典でないと立項されていない。『大辞典』（昭和十一年）が「フシミズ」を立項し、『久安百首』謡曲の「飛鳥川」を用例として掲げるのが古い。以後、「伏し水」の項に「久安百首」を引くのが、『日本国語大辞典』（昭和五十年）『小学館 古語大辞典』（昭和五十八年）『角川古語大辞典』（平成十一年）など。『角川』はさらに『文保百首』からの一首も掲げる。

注三 同書三三四頁。

注四 『陽明叢書14 中世国語資料』一二四頁。

注五 同書三五頁。

注六 『萬葉学叢刊 中世編』（萬葉集叢書第十輯）一五四頁。

注七 同書五三九頁。

注八 同書三七頁。

注九 日本古典大系本、日本古典全集本の『万葉集』は、共に、「隠りづの沢たつみなる岩根ゆも通りて思ふ君に逢はまは」と訓み、事実上定訓と言える。

（文学部・文学研究科教授）